



小農よ、自信を持て！

私がいま一番心配しているのは、農村から百姓が消えていくことである。「百姓」というのは「暮らしを目的」として農業を営んでいる人たちのことで、「百姓」以外には分類できない存在のことをいう。「小農」ともいう。対して「稼ぎ」を目的とした農業は大農であり「一姓」である。

若い世代は酪農家、ミカン農家、花卉農家、イチゴ農家などと単作で紹介されている。そして実際に自分がやっている作目以外は全く知らない人が多い。政府が長い間、農業の産業化を推進してきたから当然のことであるが、これは危ない道である。私はそう思っている。

歴史を振り返ってみる。農業、農村の近代化のスタートといわれた1960年と現在を比較してみよう。みえてくるものは何だろうか。スタート時点では全国の戸数はおよそ600万戸、耕地が約600万haである。乳牛を飼っている農家が41万戸で1戸当たりでは2頭、豚は81万戸で平均2.2頭を飼い、採卵鶏は384万戸で1戸平均12羽である。

この年私は24歳で、翌年結婚することになるが、女房が嫁いできた時、我家には黒毛の和牛の雌牛2頭とヤギ1頭、採卵鶏が20羽いた。農家の暮らしは家畜と共にあり、家畜のいない農業、農村など想像もできなかった。つまり、畜産は農業の内部に位置して、物質循環の要の役を果たしていた。

現在はどうか、販売農家(耕地30a、または販売額50万以上)の農家は113万戸(2019年2月)、酪農家は1万5000戸で1戸当たりの飼育頭数は88.8頭、養豚は5500戸で1戸当たり1738頭、採卵鶏は2200戸で1戸当たり6万3000羽だ。

つまり、畜産は農業から分離独立し「畜産業」なる別業種となり、規模拡大して企業家していった。これを「工業型農業」というのだが。「単作化」「機械化」「規模拡大」「コスト低減」の繰り返しで、設備投資も装備も増えていき、もはや路線変更も引き返すこともできない。残った道はただひとつ、倒れるまで進む、である。

そして、外国との貿易交渉で常に不安と危機にさらされているのがこの人たちのだ。競争に勝ち残った人たちが次々と廃業していくのである。しかもそれが社会問題にならない、それどころか農業問題にすらならないのだ、なぜか？ きわめてごくごく少数の人たちだからである。この国は貿易立国なのだ。だからレジャーランドや温泉ホテルの倒産と同じ感覚で見ているし、農家の人ですら自分とは無関係だと思っている。実際に農村でさえ乳牛も豚もニワトリも見ることはないのだ。

こんな社会でこんな時代にどう生きていけばいいのだろうか。同じ土俵にはのらないことだ。

昔から日本の農業の零細性が問題にされてきたが、現在世界中の農家の約73%は1ha以下、2ha以下は85%にもなるという。この人たちが自らも食べながら世界の食料の80%以上を生産しているのである。

行き詰まりをみせている先進国の工業型の近代農業に代わり、小規模家族農業によるアグロエコロジー(農業生態学)に沿った農業に転換していこうと国連が音頭を取っているのである。

小農よ、自信を持て！ である。



現代農業 12月号 意見 異見 山下 惣一 より

国は稲作農家の規模を20ha以上とみています。山・中山間地域での稲作は間もなく消滅します。わが家では12羽のニワトリがいます。百姓を目指しています。